

毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

# 山と博物館

第 6 卷 第 10 号

1961年9月25日



ヤマイタチ

雷鳥調査で岩小屋沢岳(2630m)頂上に行った折  
ヒヨコンと、とびだして来たのを撮影した

9月 撮影 千葉 彬司

大町山岳博物館

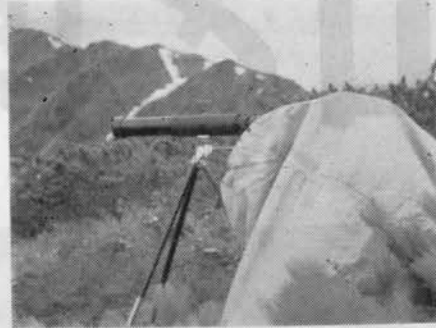
## 雷鳥調査によせて思うこと

羽田 健三

## 〇にくみ合い愛し合う

最近までテレビに「観馬車隊西へ行く」という好番組があった。その歌詩に感銘深い一節がある。「……隊長アダムスの指揮の下、時にはにくみ、また愛し合う……」である。間合いのない夫婦や親子の関係によくみられるが、私ども館員や館外の同志一同の間もそうである。みな私が大町高校に勤めていた頃の生物クラブに所属していた教え子達であり、創設運動から今日まで、計十五ヶ年の長年月を寝食をともしてきた連中だからだ。もうきつてもきれない深いエニシにつながっている。互いに骨の髄まで知りつくしており、愛すればこそそのムチを互にきびしく与えあってきている。近ければこそその暴言も飛び交い、時にはいきり立ってにくみ合うこともある

9月16日(土)のことである。その日は午後3時より昭和36年度の第二回目の山博運営審議会が開かれる予定であった。土曜日ではあったが長野の学校では講義はなく、その他の雑件は前日に処理しておいたので、私が山博に出向くことは問題なかったが、前夜既に台風が上陸する見込みが報ぜられており、16日の早朝には、同夕刻には長野県下を通過することが確実になっていた。そこで長野を出発する前に山博に電話したところ「台風下でも予定通りやる。」という。実は本年度不足する雷鳥の調査費などを審議する市議会が、18日(月)から開かれるというのに、館員の要望にもかかわらず、運営審議会に先にかけてからという常識が、いまだに果されておらなかったのである。それがようやく前日の16日に開ける段どりになったのだから、多少の無理でも開こうというのである。私はどういう理由でも台風下では中止すべきだと考えていたが、私の知らないもろもろの理由があるのだらう。時にはすなおに若い連中のいうことも聞いて



シートをかぶって行われる。  
ライチョウの観察は写真のように

やろうと、ワイフが止めるのもふり切って出発した。大町につき、中食もそこそこにして、午後1時山博に着いた。先づ会場となる講堂をみると2時間後に会議が始まるというのに、全然シタクがなされていない。私はカットとなり、「どうした。シタクが全然なされていないではないか。」と大渴をくわせながら事務室を始めてのぞく「実は本日の会議は止めようかと思うが、どうでしょう」ときた。

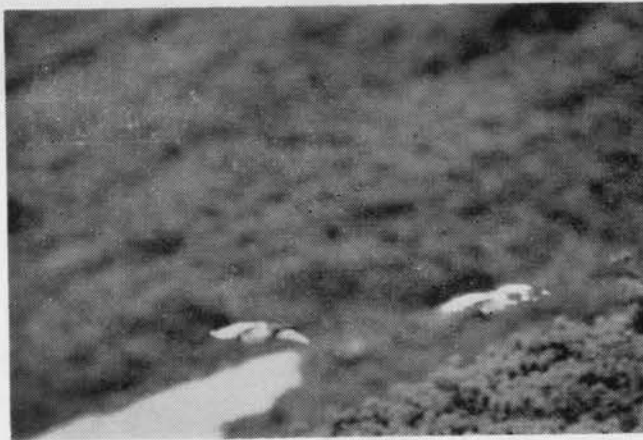
私は過去15年間延何千人もの教え子を引きつれて何百回も登山しているが、遭難はおろか、小事故でも起こした事のないのを自慢にしている男である。その代りに最悪の事態に備え、絶体無理をしないということを信条にしてきている。彼らにもその精神が移っている筈なのである。「だから長野を立つ前にいったじゃないか。台風予報は絶体だ。どんな急を要する会議でも今回は中止にすべきだ。私などどうでもよい。今からでも遅くないから至急中止にしよう。」とやせがまんする。直ちにあと2時間後に予定されている会議の中止方の連絡が委員にとられた。しかし既に家を離れておられ、連絡のつかなかった数名の委員の方々が暴風雨について登ってこられたが、全く申しわけのない不仕末をしでかして

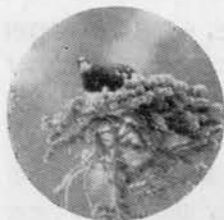
しまった。私も3時10分で直ちに長野に引き返したが、次第に激しくなる台風とともに長野に舞い込んだような状態で散々の目にあわされた

## 〇関係者は皆ノイローゼ

口論をする時にはできるだけクニクニしい言葉を探さないことにはうま味がない。大切な1日をむだにされたので、バスの時間がくるまで館員の1人1人にやつあたりを始める。いた者はとんだ貧乏くじを引いたというものだ。

春先き、空高くまいってオス同志のなわばり争いが展開される。またオス・メス同志の飛ばしようもみられる。





メスの産卵後、抱卵を始めるとオスは樹上または岩上で自分のなわばりをまもり、警戒を続ける。

「今朝長野から電話した時、前回の運営審議会で要望のあった針ノ木自然園の計画を委員の方に知らせるための図表は間に合っているかと聞いたら、お前はそんな夢物語を知らせても仕方がないといったが、どういわけだ電話のそばに相談にきていた更埴市の郡誌の先生がおられたので、ウウウとうなっただけにしておいたが全くけしからん。自然園ができなければ山博の本当の機能は果せない。現状維持は分っているようにギリ貧で廃館になるしたがって自然園を実現するか否かは山博の生か死かの切りふだだ。しかも厚生省や県も全面的に後援してくれているし、大町でも既に市是になっている。この構想をまっさきに推進すべき館員自身が、他人ごとになっているとは何事だ。」とやっつける。その館員は自然園を推進することに日頃一番苦勞している学芸員だが、一戦の後で聞くと、自然園の構想が未だに理解できないでいる超時代的なスジから、会議に自然園を持ちだすことに横槍が入り、板ばさみとなり、私の電話にわざとツケンドンにあたったことが分った。

次に別の学芸員にほこ先を向ける。「学芸員だけの雷鳥調査に移ったら中風病じみたようで研究はストップしてしまった。今、山に高橋が一人でいて研究物ができるものか。お前は新婚ホヤホヤをいいことにして、予定された登山をしないのはけしからん。」と一発落す。彼は最近気が立っているのだから、まっていたと許りに逆襲してきた。「雷鳥調査は既に赤字だ。また私費で行くにしても、館員が少い上に神社さんの後任がまだきまらないので動物飼育も重なり、計画通りに登れないのだ。こっちこそ先生にもんくがあるんだ。」とカンカンに怒り始める。「全くその通りだ。お互いに弱ってしまう。」というわけで、一喝はたちまちとり下げてともに憤懣やる方なく、天の一角をにらむのみ。この学芸員は学力もあり、こまめに仕事に打ちこめる男で、学芸員の中では一番入山日数も多い。したがって常に危険の多いアルプスに入山するのでいつも新婚の奥さんをはらはらさせており、また家を明けることが多いので周囲の人が奥さんを「雷鳥未亡人」といって同情してくれているほどである。山に入ることが仕事になってしまっているわれわれはお互いのことで、これもどうしようもない。

抱卵を続けるメス、6月中旬、5~7コの赤褐色の斑のある卵をうみ、25日前後の抱卵をへてひながかえる。

一体雷鳥の生活史の調査はとえらい仕事である。たとえば人間が朝起きてアクビを何回何時にしたという所からねんねするまでの一日中の行動を、相手に気づかれぬように追いつづけて記録をとらねばならないのに似ている。これを一ケ年連続してはじめて完成に到るので、例の下伊那の大洪水をもたらした二十数日の豪雨にも一日も休めなかったし、ましてやがてくる猛吹雪と酷暑零下数十度の冬山にも断乎として入山しなければならないのである。正に人間の意志や体力と自然の猛威との闘いに従事しているのである。したがって常時最低5人は連続して入山していなければならず、多い時には7月初旬に16名が入山した例もある。しかしながら調査員はみな夫々職場や学業や通常の館務があるので、誰でも常時入山しきっているわけには行かない。したがって絶えず交代入山をしなければならぬので下界には莫大な予備軍を備えることが必要で、いわゆる人海作戦になる。このような大規模な長期に亘る連続的な徹底した調査は国の内外に未だかつて例がないので、マスコミも取り上げるのは無理がないのだ。こころみに五月から八月末までの入山数を見ると、参加人員は33名で、延580となるが、調査員が4名で延20日、館員が4名で延100日、残りの25名の延460日が私及び私の配下の雷鳥の卒業生2名及び予備軍といつては失礼だが、お手伝いの学生たちである私は平地にいて遭難を心配しながら指揮をとっているより、登って心配していた方が気がらくで、ヒマを見つけては入山しているので、入山回数が一番多いかも知れない。もともと何から何まで始めての雷鳥の生活史の調査では、どこに転期があるか分らず、転期毎に新たな観察目標を組まねばならないからだ。ところで人海作戦は学生が好都合である。上記の割合をみても館員が少い現状では止むをえず増してくる。私の配下の学生は33名いるが、学生という身分はジャバでは最も時間に自由があるそれでもいやしくも教官たるものが、学生に対して「講義などサボレ、雷鳥の研究の方がためになる。」と詭弁を勞してまで、無理して動員している仕業である。とこ





ろが学生は直今学期末試験中で、私がいくら暴君でも登山させるわけには行かない。したがって8月末から館員や地元の同志のみにゆだねているのだが、山博の陣容は本館だけの平時編成で、その上神社さんの仕事までかぶっている。したがって現在は止むなく山に一人が細々と雷鳥を追っている仕末である。そこで雷鳥に関しても私の心中は最近決しておだやかではない。

### ミイラ取りはミイラになりたくない

今は亡き羽田のオヤヂは筆を自慢し「雷音」と号していた。お上人の前でも平気で大きなオナラをして、おつきの尼僧さんを苦笑させたり、大本願にくる院や坊の坊さんに「クツ坊主」と大喝をくわせることから生じたアダ名をとっている。私は学生に「雷鳥（カミナリのトリサ）」というあだ名をもらっている。すぐ怒る人ほど善人なのだが、私の場合は羽田のオヤヂとちがって小人物であることによるようだ。一般には「すごいファツシヨだ。暴君だ」と思はれがちなので大損だが、これで根はやさしく情にもろい方だ。私自身、自分を「外面ヤシヤ内面ボサツ」だと思っているし、私ほど人に使はれて苦勞し、バカな目を見るお人よしはいないと思っている。

26年に過去5ヶ年の苦心が実って開館までこぎつけた時、やれやれこれで大町でのご奉公も終わった。もう思い残すことなく長野の生活ができる喜びでいた。所が開館式の日、当時町会議長をされていた伊藤半二さんが祝詞の中で「創業は易く、終業は難し。」と申され、私はカクンときて、また頭に血が昇ってしまった。爾来つづけて関係しつづけて、今年にはもう開館十周年がやってくる。しかるに果しない泥沼のように、眼前には問題が山積しており、当分は足を抜けそうにない。たまたま私はどうしてこうも馬車馬式にできているのだろうか。こんな仕事にどうしてとびこんでしまったのかとつくづく情けなくなることがある。私は定年65才の長野の大学で、他の先生方のように、自分の研究や自分の家庭だけの生活をして安楽に長生きだけをねがって生きていてもよいのと思



う。しかしながら私は勿論のこと、一同は今さら手は引けない。何故ならばこれで止めてしまえば今日まで捧げた15ヶ年の貴い青春がむだになってしまうからだ。途中で止める位なら始めからやらない方が市民のためだったからだ。また公立ではあっても、長年手がけてきていると個人のもののように情が移って、山博が可愛ゆくてならないのである。苦しければ苦しい程一同の力を結集して前進するのみだ。しかし冷静に考えると山博は市立であり、教育委員会もあれば、兼任ではあっても館長もいる。したがって組織がある以上、組織外の者が首をつっこむことは良くない事も知っている。けれども山博の現状はいかんながら私たちを必要としている。私にしてからが自ら、もう私を必要としない段階だと判断すれば、さっさと喜んで身を引く決心している。私は育てることに喜びがあり、出来上ってしまったものには興味がわかない。私は私自身の職場もあるし、山博以上のもっと大きな生きがいもあり、できるだけ早く大町の仕事から去りたいのだ。

ところでわれわれ同志が幾多の犠牲や苦難にめげずに目標に到達した時はどうだろう。人は「山岳都市だから当然の施設だ」また市立だから市当局や会議や教育委員会がすべてを成したと思うだけだ。またわれわれが犠牲に堪えられずに止めるならば、とうの昔に廃館になっているが「地方財政下ではどだい無理だった」と事もなげにいうだろう。全くわれわれは苦勞性というものだ。ところで私は今まで必要がないのでなかったが、冬山の5月に始めて草の登山靴を求めたが、9月にはもうガクガクして



（左）オス同志のなわばり争い。  
（右）砂あび、雨天の日、またその直後まのぞけばひんばんに行



(上)ヒナ連れの採食,ウラジロタデにとびつこうとしている。(下)天敵,イヌワシの飛しよう。

役に立たなくなっている。まして過去10年公けの仕事として、山行きを重ねている館員の登山靴の消耗ははげしく、月ぶが終らない中に新しいものを買わねばならぬ状態が続いている。ましてその他はいはずもがなである。これは大変なことである。今からでも遅くはないから当局はぜひ手を打ってもらいたいものだ。今回の雷鳥の調査にしても自然園の開園に欠くべからざる仕事であるが1厘の予算もだしてはくれない。止むなく作戦して県から同志の名を借りて補助金をもらって、始めて仕事を起した次第であるが、補助金はどこまでも補助金だから足りる筈はない。

八月末までに10万の赤字がでているのを含め、次に県からの補助金がかかるまでの4ヶ月分の費用として30万円を要求した所、議会で審議してもらおう前に既に8万円に減らされている仕末である。8万では赤字を埋めるだけでも足りないのである。「これでは調査ができないがどうするのか」と問えば「予算の範囲でやってくれ」というだけだ。「それなら中止しろということか」と聞けば言を左右にするだけだ。しかも雷鳥の研究は個人研究だというお役人も市役所にいる。こういう言こそ大暴言である。また数年来館員は減らされ、予算は大削減され、いやしくも調査費、研究費などは開館以来1厘でもなく



棒小屋乗越から見た岩小屋沢岳の一部、稜線近くくの岩場がライチョウのねやになっている。

現在は息もたえだえに維持する費用だけである。しかるに開館以来止むところなく山博の株は急上昇をつづけ、今では押しも押されぬ日本の文化施設にのし上っているが、人はこれを何とみているのであろうか。われわれがお役所仕事でなく、自らに発して学問研究を続けて来ているからである。公けの施設でありながら、われわれ一部の犠牲を、知っても知らずでも強いているのが現状ではなかろうか。

以上、事々述べてきたが、憂町の思いが走りすぎて失言も多々あると思はれる。意のある所だけを汲みとられて、山博事業に深い関心と御同情、御協力を頂けることを切にお願いしたい。

(信州大学助教授 本館囁託)

ライチョウ調査は生態、分布、保護、増殖などを目的に本年から5カ年計画で実施されるもので第一年次は長野県科学振興会より30万円の助成を得て行われたものである。なお本調査推進に当り種池小屋にはしばしばご迷惑をおかけしたにもかかわらず、終始率直なご協力、ご便宜に預り、調査活動をスムーズに進めることができた。紙上を借りて謹んでお礼申上げるものである。

## 雷鳥日記

中島克広

5月31日

「あー」とまたあくびが出た。時計を見たらやっと11時だ。時計の針の進みの遅いにはいささかうんざりする。海川さん、松尾君(学生)の午後班と、交代の12時までまだ1時間もある。少し位早く来てよさそうなものだと思ひながら、小屋の方へ双眼鏡を向ける。だが人っこ一人見つからない。ただ赤い屋根の種池小屋が雪の中にぼつんと見えるだけ、空は真青に晴れ、陽はカンカンと照りつけ、雪溪の反射がいやにまぶしい。下方のハイマツの中から高橋君(学生)が真赤に焼けた顔をこっちに向けてニヤニヤ笑っている。彼も同様、小屋の方が気になるらしい。二人とも、午前2時から雷鳥夫婦の尻を追いつつ、いったん見失ったら調査は行きすまってしまうので緊張の連続だった。あと1時間、どうか動かないでいてくれと思わず手をあわせる。雷鳥は依然30cm位のハイマツの間の草つきで採食したり、たたずんだりという状態を続けている。連日の疲れが出たのか、高山植物の緑のベットでひと眠りという誘惑との戦いはまったく苦痛だ。1時半、雪溪の上に二つの黒い影を発見、雷鳥のいるのも忘れ、思わず手を振ってしまった。だが彼らの動きはまったくはがゆい。昼飯を食べてきたのかと疑いたくなる。腹の虫が鳴き出した。いよいよ任務交代かと思うと、ほっとし、無事雷鳥の引き渡しができるのがうれしく思えた。

6月10日

調査が行きすまってしまった。というのは、ここ2、3日、昼間メスはハイマツの中に入っしまい観察できないのだ、営巣期か産卵期へ入ったのではないかと考えられ、僕たちもいささかあせりが出る。どうしても、メスの行動をつかまぬことには、生活史で一番大切な繁殖習性を知ることができない。今朝も高橋さん、八幡さん(学生)たちは、9時半頃、かんじんのメスを見失ってしまったとのことだ。だがさいわい12時近くにさがし出して、浅原君と僕の午後班に渡してくれた。さんざんさがしたのだろう。二人とも汗がふきだしている。僕たち二人は、尾根から少し下った草つきに採食している雷鳥をはさみ、10mほど離れたハイマツの中から気づかれぬよう観察する。だが雷鳥の動きが早くなり、ハイマツの中などへ入るともうそんなことをいってはられない。いつもここでまかれてしまうのだ、無茶とは知りながら、雷鳥と2mから5mの距離で追跡だ。僕が見えぬ時には浅原君が見ていて指で示してくれる。メスはしきりにハイマツを潜るのに、雄は僕たちの頭上を、「グエ

ー」と鳴いて飛翔する。雌を守る行動だろう。本能とはいえ、なかなか暖かい夫婦愛である、だが感心しているわけにはいかない。雌からは一瞬たりとも目をはずすことが許されぬ。そのうち、雌も10mほどの飛翔を始めた「そっちだ」、「あっちだ」と二人とも夢中である。ふと消えたと思ったら、足もとの50cmほどのハイマツの下にしゃがんでいる。動きそうもないので、1m位の距離で座って観察する。まさか後でこれが巣だとは想像がつかなかった。雷鳥とのにらめっこに真剣だった。6時頃飛び立った後を見ると、地上へキバナシヤクナゲやハイマツの枯葉で粗末な巣が作っており、卵が4コあった。うれしくてとび上らんばかりだった。大きな関門を打ち破ったのだ、これで雷鳥調査も再び軌道へ乗ることであろう。

7月28日

ものすごい降りだ。扇沢まで乗せて来てくれた運転手さんが「大丈夫ですか?」と心配してくれたが、いつもより数倍も水かさが増し、茶色に濁り、荒れくるった扇沢を見上げると、いささか怖気ずいてしまった。常識では当然登山は中止である。だが山では、三石君ら仲間4人が雷鳥調査に頑張っている。彼らは明日下山の予定であるが、調査人員不足のためもう一週間頑張ってもらう事になった。そのため、大至急彼らに伝言と食料が必要である。雨はようしゃなく降る。カッパをつけているので歩きにくい上に石が滑ってひっくり返りそうになる。下を向いて、だまて、ただ歩くだけである。道が流されていくと大きく遠回したり、浅瀬を歩いたり、落石に脅かされて走ったりでさんざん目にあつた。奥小沢では300mもさか登ってようやく渡る事ができた。上ではどんなかと山の連中の事が心配になる、雨が降っても観察は続けることになっているのだ。12時半に二俣に着く。むすびを食べたがまったく味がなく、1コをつめこむのが精一杯だった。海川さんとはここで別れ、僕たちは尾根にとりついた。洪水や落石の心配は無くなったが滑って思うように登れずまた登山路は川となっていて、水の中を登らねばならなかった。

汗と雨とで体はビしょリとなり、リュックの重みがますます両肩にぐいぐいこむ。2時半にようやく種池小屋に着いた。やや小雨となったが、尾根は風速15mほどのすごい風が吹きまくっていた。小屋へかけこみ、友の顔を見るとほっとした。皆な真黒でひげがのび、歯だけがいやに白い。明日の下山を楽しみにしているだろう。おすおすと、あと1週間の調査をたのむと快よく「OK」を示してくれた、実にファイトのある連中でうれしく思った。

(信州大学教育学部 生物学教室学生)

## 雷鳥観察雑話

## 三石 紘



## 〇はじめに

アフリカの密林でゴリラの生態を調査した河合雅雄氏は、その著「ゴリラ探検記」に次のように書いている。「野外調査というもの最初の10日ないし20日というのは、雲をつかむようないらだたしい状態が続くが、それが過ぎると、対象が明確になるとともに、新しい事実が次々とでてくるものだ。そして野外研究者のみが味わうことのできる体がしびれるような感激の瞬間がおとすれ、観察記録も飛躍的に充実していくものだ。」この言葉は我々の雷鳥調査にも全くあてはまる。

新事実が刻々と明らかになり、ジャーナリズムが華々しく取上げた陰には、直接山で雷鳥を追う観察者の血の出るような忍耐と努力があったのである。

「雲をつかむようないらだたしい状態」の中の雷鳥観察者の悲喜こもごもの生態、その中の2、3をクローズアップしてみたい。

## 〇全然ロマンチックでない話

どうして山に登る？との問に、かの有名な登山家マロリーは「そこに山があるからだ。」と解ったような解らないような名答をしたという。

ある女性が私に同じ質問をした。別に私をマロリーと思ったからではない。きたらしい身なりで大通りを、のそのそ歩いていたのを奇妙に思ったからに他ならない。「そこに雷鳥がいるからだ。」などと気取ったって通する相手でないから、雷鳥を調査していると答えると「あらロマンチックね。」とのたまり「でも…」と私のからだをジロジロ見廻した。その時の私のスタイルはあまりにもアンチ・ロマンだったのである。

北アルプスで雷鳥の観察をしているというが大抵の人はすばらしいという。私にとっては地獄の苦しみだということも知らないで。

真夜中の2時頃から夜の8時、9時まで、文字通り一

日中、すべり落ちたらとうてい助からない急な雪渓や、身の丈程のハイマツのブッシュの中をクタクタになって歩きまわる。垢にまみれた体、雪焼けと不精髯で真黒の顔、血歩った眼玉を異様に光らせて、雨の日も風の日も雷鳥の尻をこそこそそつけまわす。これが雷鳥調査の実体だ。そこにはロマンチックの一片もない。良いデータを獲得するためには雷鳥と全く同じ行動をすることが要求されたあまりにも苦しい毎日だった。

## 〇交尾の話

蕃殖期の初期の雌雄を追っていたとき、我々は観察を交代する時、いつもこんな言葉を交した。「交尾はしたかい?」「いやしない。」この行為に対する関心は異様なほどだった。別に仙人生活のフラストレーションの現れではない。純粋に科学的興味を抱いていたのである。「蕃殖期中心の生活史の研究」がテーマであってみれば雨が降っても強風が吹いても、寒さや空腹や眠気を我慢して観察しているのは、すべてこの科学的事実を見極めるためだといっても過言でない。雷鳥の交尾を観察するという事は、ケネディ大統領とエリザベス女王のラブシーンを見ることより興味のあることなのである。こんなに探究心に燃えている気持も察せず、彼等は一度も科学的事実を示してはくれなかった。別にはずかしがる程のことじゃないのに……。

## 〇ロザリアに逢った話

梅雨期の頃の話である。我々は巣をさがしてビシッ濡になって歩き廻った。一週間以上の雨との斗にもかかわらず、成果は上らなかった。入山以来、パーティのヒゲ面以外女性は勿論のこと登山者一人逢っていない。四人ともホームシックでイライラしていた。しかし雨のため交代要員の上ってくる見込もなかった。

そんなある日、私は冷池小屋へ用事でかけた。庭で薪を割っていたお爺さんに用件を話し帰ろうとした時である。暗い小屋の中から赤いセーターの若い女性が突然現われた。私の心臓は高鳴り、頭に血がカーとのぼったまったく久しぶりに見る女性の姿だった。『山の娘ロザリア』ってこんな女性なんだろう。とつさに歌の文句を憶い出した。私がいまロジロジロ見たのでロザリアは気味悪そうに、小屋に入ってしまった。

夕食の時さっそく話すと、「何オぐらいた」とか「グラマーか」などと根ホリ歯ホリ、皆異様な関心を示す。中には、「よし、明日は俺が行く。何か用事はないか」という元気な奴もいた。

それから一週間後、交代要員がやつと上ってきた。

(信州大学教育学部 生物学教室学生)



## 博物館の協議会委員

大倉一雄 大町市立常盤小学校長, 平林武夫 大町市立第2中学校長, 武田武 会社員(大町山の会), 坂井行信, 会社員(大町山岳会), 菅沢六海 農業(大町市連青), 平林はるゑ (婦人会), 田中保平 毎日新聞大町支局長 伝刀成茂 農業(市議), 曾根原義郎 会社社長(〃), 平林宗兵衛 会社員(〃), ○広瀬英吉 会社社長(〃), 成沢茂三郎 農業(〃), 奥原一登 歯科医(〃), 武井勇 NHK大町支局長, 佐藤鎮夫 大町営林署長, 阿部西与 国鉄職員, △石原守明 会社員, 長沢欽平, 古原和美 大町保健所長, 田中操 大町市民館長 ○印委員長 △印刷委員長

## 動・植物園管理係の後任

故神社唯七氏の後任を人事係で募集中であったが, このほど荒井幸龜氏(42才・堀六日町)が9月26日から就任した。今後動・植物の世話をしたり, 館園の整備, 市民との連絡に当る。

## ライチョウ冬の調査

今年5月10日より, 長野県科学振興会の助成を得て,

「山岳博物館はもうからないからアパートにしる」とある市会議員が昨年, 発言したという話は, 良識ある多くの市民に, 私たちの選良の知性に対し, 疑問を持たせたものだったが, いまとなって考えれば, この博物館の実質がわからない暴言がかえって「大町山岳博物館」を支持し, 強化しようとする市民の与論を高めることになったのは, 皮肉なことであった。

皇太子や高松宮がご覧になられたということも, 市民にあらためて博物館の真価を再認識させた。ややもすれば, 一般の事業予算に押しつぶされがちないまの市政の中で, 博物館はその乏しい予算で雷鳥研究を続け, 中央の大新聞にスクープ競争をさせたのも, いうなれば大町市の市政の当事者たちの, 博物館に対する粗雑な認識よりも, マスコミを動かす全国の世論のほうがかわが国で唯一の山岳博物館の存在を, 高く評価している証拠だということも, これまた皮肉なことである。

私たちの郷土における歴史の中で, 私たちがその子孫に遺産として誇り

## 私は思う

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替, 郵便切手で長野県大町市, 大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

継続中のライチョウの生態調査は今冬も行なわれることになった。今夏, 博物館学芸員, 調査員, 信州大学教育学部学生ら延べ704人によって幾多の収穫をおさめてきたが, さらに冬の生態は全く未知の世界なので, 寄せられている期待は大きい。厳しい気象条件のもとでは, 相当な苦闘と忍耐が予想され, 今からその計画と準備に忙殺されている。

## 今年で博物館も10才

大町山岳博物館が昭和26年11月1日開館以来, 今年で満10才を数えることになる。そこで10周年を記念して, 恒例の文化祭を始め, 多彩な10周年行事を催す計画で準備中である。

## 資料寄贈

山No348.349横浜山岳会, 登攀No285東京緑山岳会, おいらく山岳会月報No.17.18.19.20 おいらく山岳会, OMCレポートNo140奥多摩山岳会, 国立公園No139-140国立公園協会, 館報No7.2大阪市立自然科学博物館, Nature Study No7.7大阪市立自然科学博物館, 山と溪谷No269山と溪谷社, モンキーNo42日本モンキーセンター

得るもののひとつに, 私はこの博物館をあげることができると思っている。もっと大きないい方をすれば, 日本や世界の山岳文化史の中に「大町山岳博物館」の巧績が強く刻みこまれるであろう。

私は教育委員在職中から, 教育は生産だ, と主張した。教育は人間の精神を拡大再生産させるばかりでなく, 近代社会の物質力を発展させる神秘な力を持っている。この論理の実証を社会教育施設としての, この山岳博物館に私は託した。いま10才の誕生日を迎えようとする博物館は, ある程度これを証明してくれた。それは新しいゼネレーションに, 自然を愛し, 探究しようとする豊かな精神をふきこんでくれたし, また黒部の開発や各種の科学調査は大町地方の経済発展に大きな原動力となってくれた。

この博物館はもうからないどころか, よその地域社会ではまねのできない精神的, 物質的の偉大なモウケ(利益)を, 大町市民に与えてくれたのである。

ほんとうの教育とは, このようなものであると私はいまなお強く信じている。(阿部西与)

山と博物館 第6巻第10号 1961年9月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場